

グローバル化と民主主義はどこへ

表題は『週刊エコノミスト』5月9日掲載のインタビュー。著書『時間かせぎの資本主義』などで鋭く資本主義の本質を洞察するドイツの社会学者、ヴォルフガング・シュレトク。グローバル化した経済や民主主義がコロナ禍、ウクライナ戦争を経てどこに向かおうとしているのかを尋ねた。抜粋して紹介したい。

コロナ禍はグローバル化による「隠れたコスト」といえる。いわゆる「経済の国際化」は良いことばかりではなく「副作用」を伴っていたわけだ。「世界が国際化」したということは、社会に利益をもたらすとともに、害をももたらした。

ヨーロッパで1500年前に最初の感染症が起こった時、感染拡大までかなりの時間を要した。それが今では誰でも飛行機で世界のどこへでも行くことができ、中国の内陸部で発生したウイルスが2日後には欧米で見つかるということが起きた。では私たちがその危険な感染症に何ができるか。グローバル化の対価として、コストが高くつくことをこのコロナ禍で経験した。

しかし、グローバル化で豊かになった者たちがコロナ禍のコストを支払ったかというところではない。ここに古くて新しい問題がある。企業はグローバル化によって生み出されたマイナスのコストを「外部化」して自分たちではなく、社会にそのコストを払わせている。振り返ってみれば、簡単に広がってしまう感染症がどれほど「高くついた」か、私たちは今回、実感せざるを得なかった。

今、生きているグローバル社会の体制が緩やかに崩壊しつつある。国家のシステムもそう。次に取って代わる秩序がどのようなものになるかは分からない。ひょっとすると以前みられたようなある程度、安定した経済や社会体制に戻るのかもしれないが、そうなるとも限らない。

この状態をラテン語で「インターレクダム」(空位時代、あるいは中間期)という。二つの統治体制の中間の時期という意味だ。「レクダム」とは「支配」を意味し、「インター」は二つの「支配体制の間」という意味だ。つまり「古い体制」がもうない状態だが、「新しい体制」はまだ確立されていない。

「古い体制」と「新しい体制」の間にはさまれていることが今の私たちの状況だ。私たちが知っている「古い体制」とは、グローバル化した資本主義、米国による一極支配、最強のドル資本体制、などだ。しかし、私たちは「新しい体制」が何になるのか、いつ来るのか、知る由もない。ただ「古い体制」がもう十分に機能していないことだけは分かっている。

京都の定例研究会で、資本主義とその後の経済・政治について報告・議論してきたが、このインタビューから示唆を受けることが多かった。さらに検討していきたい。

‘(2023年4月28日)